



からしだね

2018年7月号
(540号)

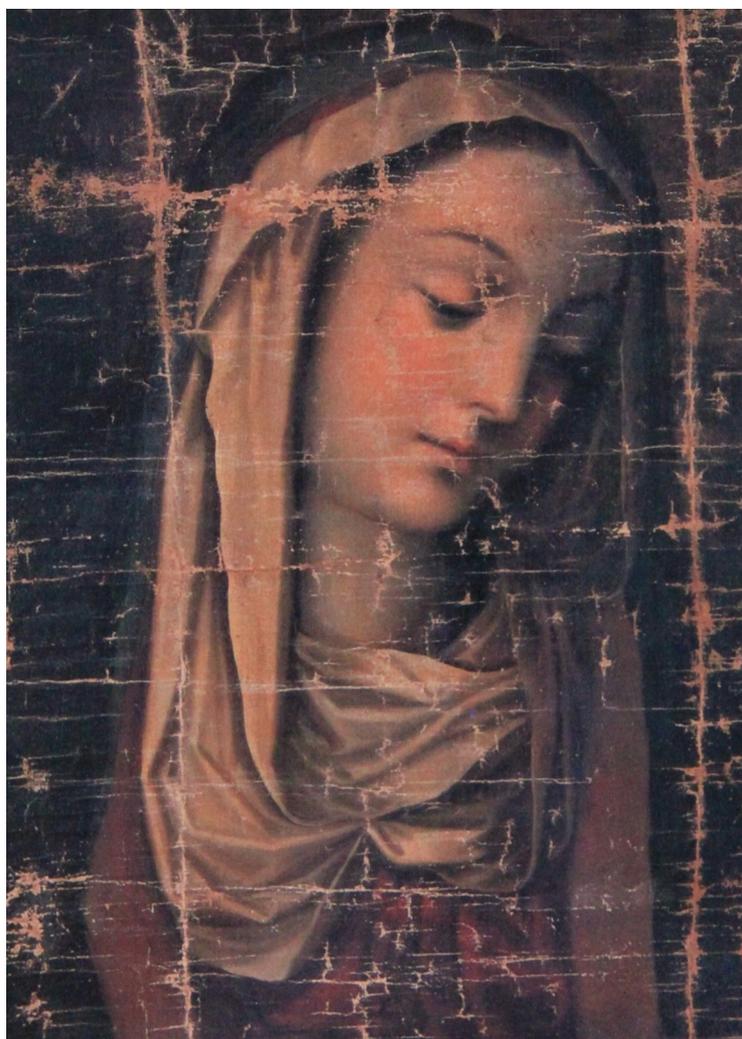
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父による巻頭言

「怖れずに信じるのです」(マルコ5・21～43)

FEAR NOT...BUT BELIEVE! (Mk 5:21-43)

池田・日生中央合同黙想会のテーマは「共同体と信仰」

大人の日曜学校だより (5/20)

ガレッジ・セールを開きました

みんなの談話室

Don't think twice, it's all right.

(くよくよするな)

7月のカレンダーへの追加

巻頭言

「怖れずに信じるのです」(マルコ5・21～43)

ノイ・プラザ C.P.

今日の福音書にはイエスがおこなったふたつからなる癒やしが語られます。最初のはユダヤ教礼拝堂の役人ヤイロの家にイエスが向かう途中に起きます。12歳になるヤイロの娘が重篤で、父はイエスの助けを求めます。役人の求めにイエスは恵み深く応じるのです。さてヤイロの家に行く途中、群衆のなかにいた病気もちの女がひとり、イエスの服に触れます。彼女の病はたちどころに癒やされます。イエスは女に言うのです—「娘よ、あなたの信仰があなたを救った—安心していきなさい、病は癒えたのです。」

このあとすぐイエスはヤイロの娘が死んだことを知らされます。もう煩わされなくてもいいわけです、と人びとが言います。イエスはしかし、こう言うのです—「怖れずに信ぜよ」(マルコ5・36)家に着いたイエスは「娘は死んだのではなくて寝ているだけだ」とみんなに言います。誰もイエスの言葉を信じないようでした。そこでイエスは娘に起きあがるよう命じます。みんなはほんとうに起きあがった娘をまえに驚嘆するばかりでした。

ヤイロや出血に苦しんでいた女がイエスにおいた信仰は、これらの奇蹟を引きおこすのに決定的だったようです。10年ほどのあいだ、女はこの病に

苦しんでいました。健康を取り戻そうと、有り金残らず使いきってしまったにちがいないのですが、なんの役にも立たず最後にイエスのことを耳にするのです。いつばうヤイロにすれば、娘を治して欲しいとイエスに求めるのは簡単ではなかったでしょう。ユダヤ教礼拝堂で役人をしている自分が、過激とは言わないにせよ、リベラルすぎると多くのユダヤ人が考えていた人物に助けを求めるのは、どれほど不適切だろうと思つたに違いありません。それでも個人的なこうした疑問を乗り越えてヤイロは手を伸ばしイエスに救いを求めました。そして彼の望みはかなえられたのです。

われわれは誰もがみんな、心の奥底に力強い神からの贈り物を秘めています。これは信仰の恵みです。聖書では信仰が山をも動かす、とイエスが教えているではありませんか。このことをいま話したふたつの話は鮮やかに示してくれる。さまざまな試練や困難を背負いこんで気分が沈みこむとき、自分たち一人ひとりのなかに隠された力の源があることを忘れないのは、おそらく最高に大事なことでしょう。怖れに囚われないようにしましょう。信じさえすれば良いのです。

7月のガラスケースのことば
狭き門より入りなさい

マタイ7・13

FEAR NOT...BUT BELIEVE! (Mark 5:21-43)

Nonoy Plaza C.P.

Today's gospel story tells of a dual healing which Jesus performs. The first one happens while Jesus is on his way to the house of Jairus, an official of a synagogue. Jairus' 12-year-old daughter is seriously sick and Jairus seeks Jesus's help. He graciously accedes to the official's request. On their way to Jairus' home, a sick woman in the crowd touches Jesus' cloak. She is instantly healed of her sickness. Jesus then says to the woman: "Daughter, your faith has made you well; go in peace and be healed of your disease."

Soon after this, Jesus is informed of the death of Jairus' daughter. And is then advised not to trouble himself any further. But Jesus says: "Be not afraid, only believe" (Mark 5:36). In the house, Jesus tells everyone that the girl is not dead but is only asleep. Nobody among the crowd seemingly believes in what he has just said. He thus commands the girl to get up. And to the surprise of all, she does get up.

The faith that Jairus and the bleeding woman put on Jesus seem to be crucial in making these miracles happen. She has been suffering from her illness for a dozen years. She must have spent all her money just to get her health back but to no avail until she hears about Jesus. On the other hand, it must have been not easy for Jairus to request Jesus to heal his daughter. He must have thought how inappropriate it is for a synagogue official to seek help from a person who is considered by many as very liberal, if not radical. Still overcoming personal doubts, Jairus reaches out to Jesus. And his wish is granted.

Deep within each of us, we have a very potent gift. It is the gift of faith. In the Bible, Jesus teaches us that faith can move mountains! The two stories that I have just mentioned clearly illustrate this. Perhaps in moments when we feel down, saddled by various trials and difficulties, it would be of utmost importance not to forget that hidden source of strength in each one of us. Let us not let fear take hold of us. All we need to do is believe.

池田・日生中央合同黙想会のテーマは「共同体と信仰」

5月22日宝塚黙想の家で合同黙想会がありました。今年、日生のお世話で芦屋教会の川邨裕明神父様の指導のもと25名程が参加しました。

川邨神父様は、15年程コープで働かれた後に司祭となられ、教会の司牧の他、教誨師のお仕事をされ小中学生にお話する機会が多いそうでとてもわかりやすいお話でした。黙想会のテーマは、「共同体と信仰」でした。

☆やまあらしのジレンマ...寒い冬の夜、二匹のやまあらしがお互いをだきあって暖めようとするが近づきすぎると針でお互いを傷つけ離れすぎると寒くて温まらない。そのうち二匹はちょうどいい間合いを見つける。人間関係もいつしよでちょうどいい距離を見つけることが大切である。しかしちょうどいい距離というのは、世代間によってちがう。

イザヤ書11:6~9に理想の姿が描かれている。それぞれの特徴、持ち味を変えずにそのままで神様がくることによってお互いに傷つけることなくいつしよにいることができる。

絵本「あらしのよるに」(おおかみやぎがいろいろなことをのりこえて友情をむすぶ)には、群れを離れて周囲にふりまわされず自分で決めていくことの大切さと相手をコントロールしたい、支配したいという欲求を克服しないといけないというメッセージが含まれている。

☆絆(きずなどほだし)...大震災のあと特に絆が強調されているが強調されすぎではないか。絆には、もうひとつの読み方がある。それは、「ほだし」である。「ほだし」とは、お互いをしぼりあう関係である。人間関係には、きずなどほだしの両面が必ずある。聖書でこのことが描かれているのは、イエスが、弟子たちの足を洗われる箇所である。「イエスは、終わりまで愛し抜かれた。」そして「足を洗われた」。「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならぬ」。ここに「ほだし」が描かれている。

ほだしは未来永劫結ばれているのではなく、いつの日かに新しい関係が築かれねばならない。一つになることや同じであることを強調しすぎると危険で

ある。異質なものを排除するからである。教会も仲がいいことを強調しすぎると危険である。開かれた仲の良さが大切である。

☆トランプ大統領になってフェイク・ニュースということばが使われるようになった。

何度も世の終わりがくるといううわさがながれるがどうしてこういうニュースが出るのだろうか。それは、人間は、悪い情報が好きだということとだれも害を受けないからだ。だがとんでもないことを、惹き起こすこともある。たとえば、オイルショックの時や東日本大震災のときのチェーンメールなど。

コープで働いている時にうわさの出所を徹底的に調べようと思ひ20人ほどと一人ひとり面接をしたがつきとめることはできなかった。わかったことはみんな自分が被害者だと思っていたということだけだった。うわさというものは、こういうものである。火がないところに煙は立つのである。

☆共同体とコミュニケーション・・・わたしたちは、情報の世界にいる。情報の中からメッセージを受けとらなければならないが、ひとは自分にここのよい情報メッセージを選ぶ傾向がある。

どうしたら一番うまくうそがつけるかというひとつは、相手が聞きたいことを言うことである。「これを食べたらやせますよ」等。もうひとつは、自分もうそを信じているときである。例えば震災前の原発信仰（原発は、安全であるという実態のない思い込み）やイラクに大量破壊兵器があるというまちがった情報などである。わたしたちは、メッセージを受け取るときにはそれを正しく読み取ること（LITERACY）が必要である。

☆人が話している時にわたしたちは何によって判断するであろうか？・・・顔（表情）が55%、声の大きさ・質が38%、言葉の内容が7%という実験結果がある。話されていることよりもその表情で判断することが多いのである。どんなにきれいな言葉を用いても見抜かれるのである。こちらとしてはメッセージを伝えたいつもりでも伝わっていないことが多い。人は聞きたいようにしか聞かないのである。一方、メッセージには伝わりやすいものと伝わりにくいものがある。怒りや悲しみなどのマイナスの表情のほうが喜びや楽しいなどのプラスの表情より伝わりやすい。きらいというのは、すぐに伝わるのである。

☆神様もメッセージをいっぱい送っている・・・例えば、ヨハネの手紙4・7～21。神様は、メッセージを送り続けている。神様の愛が、私達のなかにあ

ふれだす時、初めて人を愛することができる。

☆映画「しあわせのパン」・・・いろいろな事情をもった人たちが、ある店のパンをわかちあって新しい力をえていく話であるがこれは、まさにミサである。いろいろな体験を経た人々が聖堂に集まり仲間で祈り一つのパンを分かち合って力を与えられるのである。

☆小一の男の子の詩「うそ」（河合隼雄の本の中で紹介されている）

ぼくは学校を休みました

おかあさんにうそをついたからです

何のうそかというといえませんが

おかあさんをなかせてしまいました

ぼくもなきました

おかあさんは、

こんなおもいやりのない子とおもわんかった

こんなくやしいおもいしたのははじめてや、

といいました

ぼくはあほでまぬけでばかなことをしたとおもいました

ぼくもかなしくてころがいたい

それでも、おかあさんは

なおちゃんのことがだれよりもすきやでと、

だきしめてくれました

もう二度としません

「それでも」が大切である。人間関係がくずれる時がある。弟子たちもイエスを裏切った。人間関係がこわれてもうだめではなく新しい関係を生み出すきっかけになりうると信じるべきである。

☆本「最後だとわかっていたら」・・・高層ビルへの9・11テロで10歳の息子を亡くしたノルマ・コーネットが書いた本である。

「わたしたちは、今日この人と会うのが最後だとわかっていたらもっと愛をもって接するであろう」。ある老司祭から言われた言葉がこころに残っている。「このミサが最後のミサかもしれない。だから今日のミサが最後だと思ってささげている。」このことをいつも意識することが共同体のなかで一番大事なことである。

私の拙文では、講話に川邨神父様が込めたメッセージがなかなか伝わらないと思います。広報で黙想会のCDを貸出していますので興味のある方は、お借りください。

研修委員会

大人の日曜学校だより

5月20日 福音の分かち合い

「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」

ヨハネによる福音書 15・26 - 27、16・12 - 15

この週は、聖霊降臨がテーマでした。いわゆる父と子と聖霊です。父は神、子はイエス、では聖霊とは？

ただ、“霊”と言っても“お化け”ではありません。ギリシャ語原典では“πνευμα (プネウマ)”という単語が使われています。これは、同じ週の聖書と典礼の使徒言行録の中の「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、他の国々の言葉で話した」という一節に登場する“霊”という単語も“πνευμα (プネウマ)”になっています。

このプネウマには、もともとは“息”とか“風”といった意味があるようです。そして“聖なる”とは“ἅγιος (ハギオス)”というギリシャ語の活用形で、“聖霊”は“πνευμα ἁγίου (プネウマ ハギオウ)”となります。また、使徒言行録でも、ヨハネ福音書でも、プネウマには定冠詞“The”をあらわす“το (ト)”がついています。従って、初代教会の始まりにおいても、聖霊は特別な意味を持つものとしてすでに登場していたようです。

この聖霊、ことに霊については、カトリック神学の重要な柱のひとつですが、と同時に、客観的に考えた場合、これはカトリックの教義独特のユニークな一面とも言えます。そしてそのような教義が生まれ、成立していったのは、初代教会の頃から中世にかけてですが、気がつけば、私たちはいまも古代や中世、その当時の世界観が継承された文明の中に生きています。もちろん、私たちも霊や秘跡のはたらきは信じていますが、一方で、こうしたある意味興味深いとも言える面については、語弊はあるかもしれませんが、それだけカトリックは面白いということも出来ます。ですので、私たちキリスト者は、真剣に祈り、イエスのみ旨について考える中で、時にはカトリックの世界ならではの面白さを堪能(たんのう)できるという、ほかにはないライセンスを得ているといえるかもしれません。

ガレージ・セールを開きました



5月20日、この日は、カール記念館一階が朝市に変身

東北から届いた新鮮な野菜や果物。海産物もあれば、床や机に広げられた古着、靴、かばんに雑貨類。奥の食堂からはコーヒーの香りと共に手造りのお菓子が並ぶ喫茶コーナー。

ペテラン(笑)店員とにわかスタイリストが『これよう似合ってるやん~このブランドがたったの100円なんて嘘みたいでしょ~』等々賑やかに、お店やさんごっこを楽しみました。

これは、いつも皆様からの沢山の提供品があるお陰です。そして、お買い上げ頂き本当にありがとうございました。

硬貨を握りしめてお母さんやお父さんのプレゼントを一所懸命探して、笑顔で買い物してくれたお子さんもありがとう~。

楽しみながら、環境に優しいリサイクルもして、寄付もできる。一石二鳥どころでなく一石三鳥?(笑)。また、秋のバザーも致しますのでご協力よろしく願いいたします。感謝のうちに。

社会活動委員会

大人の日曜学校に参加していると、期せずしてそうしたことに気づかされることがあります。そこはふつうの学校やお勉強とはことなっているかもしれません。そしてその多くは張り詰めた議論からではなく、仲間どうしによる打ち解けた語りの中から生まれています。

研修委員会

みんなの談話室

Don't think twice, it's all right.

(くよくよするな)

S.H.

6月18日朝、マグニチュード6.1の地震が大坂北部を襲いました。池田教会も、一部おみどうのガラス窓やマリア様の聖像が割れるなどの被害に遭いました。阪神淡路大震災から23年、和歌山県沖で起きるとされる南海トラフ地震への警告はたびたび報じられてきましたが、大阪の内陸部でこうした直下型の地震災害が起きるとは、多くの人は予測していなかったのではないのでしょうか。不測の事態、それは人間にとってつねに起こりうるものであり、自分自身に重ね合わせてみても、人生とは予期せぬことの連続のようです。

中学生の頃、当時僕は現在の侍者会のように毎週教会に行く習慣はほとんどありませんでした。とくべつ何か夢中になれるものといったものもなく、そんな空虚さの中にいた時期、あるフォーク歌手に出会いました。ボブ・ディラン(以下B・ディラン)写真のアルバムジャケットの人です。一昨年には、75歳でノーベル文学賞も受賞した人物です。



このアルバム『時代は変わる』が発表された1960年代、日本は戦後の繁栄期をむかえ、若者の間では反戦運動がさかんだった時代でした。この年代、歌手のB・ディランは数多くのヒット曲を世に送りましたが、その中に“Don't think twice, it's all right”という曲があります。十代の頃、とくに何回も繰り返し聴いた曲です。日本語にすると「くよくよ考えるな、大したことはないさ」といった意味でしょうか。

現在、私も教会のお手伝いを頼まれるままにしていますが、教会の仕事ををするうえでは上手く行く時もあれば、そうでない時もあります。実際、上手く行くか行かないかは、半々くらいです。あの時あ

れば良かったとか、こうも出来たはずだとか、色々考えてしまいます。そんな時には決まってこの歌が頭の中で流れ出します“Don't think twice, it's all right”(くよくよするなよ、大したことはないさ)。

このフォークシンガーのことを最初に知ったのは、宝塚にある祖母の家でだったと思います。母の兄弟たちが育った家で、そのうちの叔父の一人が使っていた部屋の壁に、B・ディランのポスターが貼ってありました。その人は学校を出たあと、青年期を現在の西成区釜ヶ崎でボランティアをして過ごし、その時分には現在の子どもの里の方々とも知り合い、その後、東京や長野の教会施設でも働いていた時期があったようです。当時は、収入はなくても、食べるものと寝る場所には何とかあった時代でした。

そして三十歳頃、結婚を機に上智大学を受験しなおし、そこで資格を得て、現在は東京の品川区にある福祉施設の所長をつとめているとのこと。

叔父の残して行った一枚のポスター。それが、自分の人生に与える影響など、当時まだ小さかった私には想像することも出来ませんでした。それが時を経て、いつの間にか目まぐるしい毎日に追われる日々の中で、一日のすべてが終わり、独りになったとき、ベッドに寝っ転がってその頃の古き良き時代のロックンロールやカントリーブルースを聴くことが、いまの自分にとっていつしか僅かな安らぎの時間になっていました。

そんな時、ふとまだ自分が十代だったあの日の頃、ロックになんか夢中にならずに漢字ドリルのひとつでもやっていれば、自分の人生も違ったものになっていたのではないだろうか…。そう考えることもあります。けれども、ぼんやりと天井を見つめながら、そんなことを思いめぐらしていると、またあの曲がギターの音色とともに流れだすのです。“Don't think twice, it's all right”(くよくよ考えるなよ、大したことはないさ)

時代は変わる。人は変わる。今度の地震で、また新たな出来事に私たちは遭遇します。

教会もあらたな時代をむかえ、変わって行くと思います。そして人生も予測不能で、すべてをプログラムによって計算しつくすことは不可能でしょう。でも、たとえそうだとしても起きてしまったことにくよくよせず、気を取りなおし前を向いて歩きだす。その一歩を神もお望みだと思います。そして、私たちにはそれが出来るはずです。そう勇気をだして新たな時代を歩んで行きましょう。

7月の教会カレンダーへの追加

7月1日 地区委員会開催
 7月1日、8日、15日、22日 13:30～
 信仰入門
 7月5、12日(木) 10:30～
 聖書百週間 (8月は休み)
 7月6日、13日、20日、27日(金) 14:00～
 福音書を学ぶ会
 7月11日(水) 司祭の集い(地区委員会)
 7月14日(土) 17:00～松本神父様追悼ミサ

表紙の絵について

阪急中津駅近くにある南蛮文化館所蔵の「悲しみのマリア」である。

中津の地主、北村芳郎さんは戦後にキリシタン関係の遺物を収集して、小さな美術館を1968年に開いた。美術館は1年のうち、5月と11月の2か月間だけ公開されている。それを知り、5月末日に美術館を訪れた。南蛮屏風や聖像、聖画、聖牌など、よくぞ今日まで壊れず、失われずに残っていたものだ、と改めて感じるような収集品がところ狭しと飾られていた。

中でも、この「悲しみのマリア」は目を惹いた。首を傾げ、伏し目の若いマリア。静かな悲しみがひしひしと伝わってくる。ラファエルのマリアにどこか似ている。しかし画面には大きな傷や小さな傷が縦横に走っていた。その傷こそがこのイタリアの油彩画の劇的な歴史を伝えているのだ。絵はキリシタン禁制の時代、折り畳まれて竹筒に入れられ、家の土壁の中に埋め込まれて、何百年も隠し続けられた。それゆえに折り目が今も痛々しく残っている。

朝日新聞の記事によると、「悲しみのマリア」は100年ほど前の大正の頃、福井の毛矢にある奥田医院の家の土壁から見つかった。江戸時代の初めに、福井に奥田無清という隠れキリシタンの医者がいた。1643年に捕らえられ、江戸へ送られて、福井藩の江戸屋敷で刑死したか、拷問で亡くなった。無清は「悲しみのマリア」を隠してきた奥田家の先祖にあたるという。当時、なぜ福井にキリシタンが住んでいたのか。それは柴田勝家がキリスト教に寛大だったからではないか、と推測されている。

悲しみのマリアよ、われらの信仰がこれからもとぎれなく続くよう、祈りたまえ。 Y.N.

(画像の掲載については南蛮文化館の許可取得済み)

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会

7月26日(木) 10:00～15:30

指導:山内十束神父



■週末黙想会

7月21日(土) 17:00～7月22日(日) 15:30

指導:山内十束神父

■韓国語による聖書の勉強

7月25日(水) 10:00～15:00

指導:アンドリュー神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎ 0797(84)3111

編集後記

パリに長年住んでいる友がいる。久しぶりにメールが来た。胸腺腫が見つかり、悪性の疑いが濃いとのこと。なぜか気管支炎も長引いているらしい。どんなにか心細いことだろう。だが簡単にはお見舞いにも行けない。でも、思い出した。十年も前にパリへ行ったとき、彼女が不思議なメダイの聖マリア教会へ連れて行ってくれ、私はそこで不思議なメダイを購入したのだった。そうだ、不思議なメダイを片手に持ち、マリア様へとりなしを祈ろう。ところが、箱から取り出してみると、なんとそれはメダイではなく、メダイをかたどった、冷蔵庫などに貼る磁石付きのステッカーではないか。仕方がない。それをさすりながら、マリア様に念じた。何日かして、友からメールがまた届いた。精密検査の結果、今のところ腫瘍はステージ1で、一年後に再検査をしましょう、と言われたそうだ。ほっとした。私の小さな奇跡の物語である。

ソフィー